

「続・アルプスを舞台にした映画」 ～『山』～

赤澤 東洋

ジャーナル第 52 号で私の観たアルプスを舞台にした映画を取り上げ、最後に「どなたか他にいい映画ご存じなら教えて下さい」と結んだところ、早速Nさんからハリウッド映画「山」をご推薦いただいた。山らしい山を見たことのなかった長崎の高校生、いたく感動したとのお話で、その頃Nさんより 3 年後輩で田舎の中学生だった私には眼にする機会もなく、後年何かの折りに耳にし、ただその存在を知るのみ、指摘を受けて初めて「ああ、そういえばそんな映画聞いた事があったよな」と思い出した。居住する上尾は市制施行前（施行は 1958 年）で、町に一軒だけある映画館「上尾映劇」は封切りから半年遅れの三本立て邦画専門、こちらは大友柳太郎が大好きで「怪傑黒頭巾」や「鳳城の花嫁」に夢中になっていたというレベル、お馬鹿な田舎もんであります。

なにはともあれ早速の嬉しい反応を得、ひょっとして「TSUTAYA」に DVD がありませんか？と探しに行ったが、ビデオの頃に VHS が出た事はあるが、今は入手困難とのお話で残念ながら諦めて、その旨Nさんにお話したところ、何とNさん、アマゾンで DVD を探し出し入手し貸してくれました。これはまあなんと有難いことで、大変面白かったので此処にご紹介させていただきます。

題名：「山」（原題：The Mountain）

製作：1955 年（日本公開：1956 年）

パラマウント配給

監督：エドワード・ドミトリク

原作：アンリ・トロワイヤ

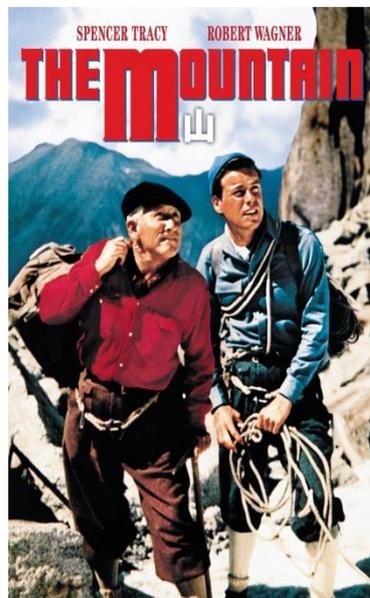
出演：スペンサー・トレイシー

（1900～1967）

ロバート・ワグナー（1930～）

クレア・トレヴァー（1912～2000）

E・G・マーシャル（1914～1998）



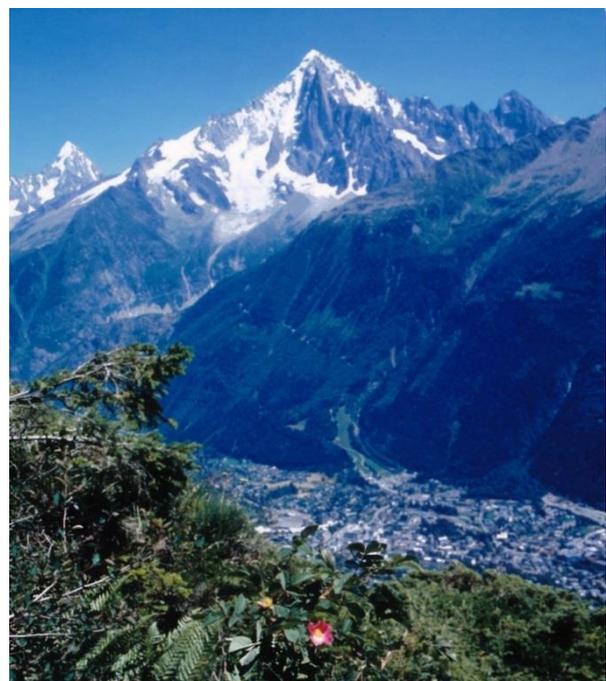
映画はいきなりインド旅客機の

アルプス墜落シーンから始まり岩

山に激突し炎上する飛行機（このシーンの岩山セットはチト安っぽい）。次いで大きな山をバックにタイトルやスタッフの紹介となるが、このオープニングの背景に出てくる山はモンブラン山群の最高の展望台として知られるプランプラ～フレジュールのハイキングコースから見るヴェルト針峰（4122m）で、奥にはシャルドネ針峰（3824m）の槍が尖っているのも見える。

カラーというより天然色映画と言われていたあの頃、長崎の高校生がこの色鮮やかな大きな山の景色を見て冒頭から引きこまれたであろうことがよく分かります。

[CD ジャケット 右は原版のひとつ]



[ヴェルト針峰とシャルドネ針峰（左奥）、2002 年筆者撮影⇒]

乗客全員絶望と見られるも救助隊が結成され、羊飼いのザカリー（スペンサー・トレイシー）は先導を依頼される。彼は元山岳ガイド、飛行機が墜落したボード山の初登頂者であり誰よりもこの山に詳しいのだが、三度山から落ち、自分は山から嫌われていると10年以上前に引退しており、もう登れないと頑固に辞退する。あたふたと出発した救助隊だったが現場に辿り着けず失敗、ザカリーに代わって先導した古い友人サーヴォスは2人でクレパスに落ち、2番手を助ける為に自らザイルを切断して命を絶ってしまい、救助隊の派遣は中止、翌春まで延期となる。悄然として戻ってきた救助隊から離れ、草原からボード山を見上げて古い友人サーヴォスの名を呟き十字を切るザカリー。見上げるボード山、これはシャモニー針峰群の代表・ドリユ（3754m）で、尖っていて実に恰好良い。

今は羊飼いとしてみんなつましい生活をしている初老のザカリーは結婚もせず親子程も歳の離れた弟クリスの面倒をみてきて、弟が可愛くて仕方ないのだが、弟はそれをいいことに我が儘一杯、こんな貧乏生活から抜け出して村を出て行くことしか考えてない。どうしようもない出来そこないクリスを演じるのは若き日のロバート・ワグナー、「タワーリング・インフェルノ」位しか印象がなく、むしろナタリー・ウッドと二度も結婚した事で知られている俳優だが、お馬鹿な役をそれなりに理解し思いっきり馬鹿になり切っている。



[ドリユの針峰、2002年筆者撮影]

事故機には金が積み込まれていたと聞き込み、クリスは死人にはもう用のない金や宝石を漁りにいこうと兄を誘うが、二度と山に登らないと決めているザカリーは断固拒否するのだが、それで収まるわけではない。欲に目がくらんだクリスは1人で山へ登ろうとし、見かねたザカリーはとうとう折れて同行する事にする。弟に甘くデレデレするダメな兄。

ともあれこの映画の見所は雄大かつ美しいアルプスの景観もさることながら、クライミングシーンのリアルさにあると云って良いだろう。名優の誉れ高いスペンサー・トレイシー（アカデミー賞主演男優賞に9回ノミネート・この記録は破られる事は無いだろうと云われている）この時55歳、熱演です。



[スペンサー・トレイシーが熱演するクライミングシーン]

初登頂を祝すドキュメンタリー映画はさておき、山岳映画の登攀シーンには生か死かという極限状態で如何に生き抜いたかとか、身体能力に長けた若者が持っている限りのテクニックを駆使して勇敢に難

所に挑み、スリリングに恰好良く難場をクリアしていく姿だとかを見せ場にするものが多いが、初老のザカリーのそれは決して恰好良いものではなく、ハラハラして観てられないほどにいかにも危なっかしい。もう10年以上も山から離れ、年齢も50歳代という人物設定を考えれば致し方ないのだろうが、華やかなムーブとは程遠く只愚直に上を目指すだけで、それがなんとも素人っぽくて親しみを感じてしまうのだ。60年前のクライミングなんてあんなものだったのかもと思う。手掛かり得ようと岩角求めてそろそろと手を伸ばし緊張して舌を出し唇を舐めながら少しずつ身体をずりあげていくシーン、あるいは左手で必死に岩にしがみつきのながらいっぱいに右手を伸ばし、震える手でピトンを打込みカラビナを掛けていくシーン、疲労で足が攣ってしまう弟等、少しばかりクライミングでリード経験ある私にはその緊張感が我がことのように伝わってきて手に汗握ってハラハラしてしまうのだった。又、フリークライミングの世界ではピトンやカラビナ等の人工物に手や足を掛けたりすると講師達に「ダメ！」と怒鳴られるのだが、命のかかっている現場ではそんな悠長な事は云ってられない。何でもありでカラビナは掴むし、ピトンに足は掛けるしで、そこの辺りの臨場感が実にリアル、我がわずかな経験からも「ウン、ウンそうなんだよ」と頷けるのだった。登攀シーンはセットが多かったにしても、スペンサーもロバートも相当練習したに違いない。先鋭的クライマーには不満が残るかもしれないが、中途半端クライマーの私には充分楽しめ、親近感を抱かせてくれた。

イヤイヤながら久しぶりに岩に取り付いたザカリーだったが、よじ登る事に没頭するにつれ、次第に現役時代を思い出し、バランス崩して落下するクリスを肩がらみで確保、滑るロープで手のひらを血まみれにしながら弟を引っ張り上げて倒れ込んでしまうのだが、彼はこの時すっかり登山家になり切っていて「これは初冬のこの時期に兄弟で成し遂げた快挙」「自慢出来るぞ。一生の思い出だ」と満足感で一杯、愛する弟と登った事が嬉しくて事故機の事等すっかり何処かに吹き飛んでいたのだった。ウン、これって何と無く分かる気がします。それから先のストーリーの展開は観てのお楽しみとし、気になった共演者ですが、終盤、奇跡的に生存していた若い女性を救出し下山したザカリーから事情を聴取する救助隊長はE・G・マーシャル。1960年代に放送されたテレビドラマ「弁護士プレストン」で日本でも人気があったので憶えている人も多いだろう。又、フィナーレと一緒に馬車に乗る主人公に惚れている未亡人マリー役はクレア・トレヴァーで、ジョン・ウエインを売り出した「駅場車」で酒場女ダラス役だった人。雰囲気まるっきり変わっていて言われなければ分からないに違いない。そしてドリユの映像と重なって映画はThe Endとなります。

この映画でストーリーとは関係無しに興味を惹かれたのはアルプスの寒村の農民の生活。いかにもアルプスらしい牧歌的な草原に建つ一軒家は牛が同居し羊も遠慮なく入り込んでくるような家。若者は逃げ出したくなるだろうなと思ったが今はどうなのでしょう？



又、当時の登山スタイルも懐かしかった。ベレー帽にニッカボッカ。杖にもなる長いピッケル。手作りのような古いリュックザック。気をつけて観ていけばモンブランもボソン氷河も見つかるでしょう。

ロケ地のシャモニーに行った事のある人、あるいはこれから行こうと計画している人には是非観てとお勧めです。

Nさん、いい映画ご紹介頂き有難う御座いました。